

放流用ナマコ種苗の効果的増産手法の検討

調査結果

- 1. 課題名 放流用ナマコ種苗の効果的増産手法の検討
- 2. 実施状況
 - 5月～6月 天然採苗器設置
 - 8月～9月 人工種苗飼育器設置
 - 9月11～30日 天然採苗器取り上げ、計数測定
 - 11月7～14日 人工採苗器取り上げ、計数測定
 - 12月～ データ整理
 - 3月～ 共同研究者との報告検討会

2. 概要

(1) 天然採苗および人工種苗育成の結果

- ・水産試験場（試験研究機関）

5月から6月に小浜市仏谷海域と敦賀市手ノ浦海域において、カキ殻や波板を用いて採苗器を延べ6回海面下に吊るして天然採苗試験を実施した。9月の取上げの結果、平均体長25.5mmの稚ナマコを平均0.3個/カゴ採苗したが、安定した種苗の確保には至らなかった。

- ・小浜市漁業協同組合、大島漁業協同組合、敦賀漁業協同組合（共同研究者）

各漁協の3海域（小浜市仏谷、おおい町大島、敦賀市色と浦底）において、8月から9月に人工種苗（平均体長7.8～8.4mm）を、カキ殻や波板およびネットを利用した育苗器に300～500個/カゴに収容して中間育成試験を実施した。この結果、垂下直後の脱落も脱落なく、育成1ヶ月までは順調な生残が見られた。しかし、11月の取上げの結果、1カゴの平均生残個数と平均体長は、仏谷で20個、27mmとH24年の154個、38mmよりも少なく小型であり、他の海域でも浦底35個、17mm、色9個、12mm、大島で42個、11mmであった。

これは、期間途中の大雨の影響で脱落やへい死によって減少し、餌料環境が悪かったためと推察された。一方、目合いの細かい大島のネット区で239個、16mmが生残したことから、ネットを利用した育苗器の改善によって脱落が抑制され、より効率的な育成が可能であると考えられた。図には中間育成結果うち生残状況が良かった育成海域の結果と前年度の優良事例を比較した。

(2) まとめ

ナマコ放流種苗の安定確保には、育成器の改善によって人工種苗を用いた飼育技術がさらに向上すると考えられた。

(3) 今後の予定

人工種苗の育成手法改善により放流規模の拡大を図るとともに、天然採苗に適した時期や場所を再検討したい。

主な育成海域の結果と前年度との個体数比較

